

ソシュールにおける「伝統的時間」の問題

——松澤和宏による原資料の解釈の再検討

戸 田 功

はじめに

ロラン・バルト晩年における「転向」の存在を主張する松澤和宏は、そう主張する根拠として、バルト個人の伝記的事実と時代背景を挙げるとともに、トクヴィル、アレント、ソシュール三者の言説を援用していた¹⁾。松澤の主張の真偽を確かめるためには、第一に、松澤が援用しているソシュール、アレント、トクヴィルの言説の真意の確認と、松澤による援用のあり方を検討する事、そしてその上で、バルトが生きた時代背景やバルト自身の伝記的及び思想的問題を検討する必要がある。

そこで本稿では、松澤が、近年、一般に流布した思想とその実像の違いが指摘されているソシュールの『一般言語学講義』（かつてバルトが「テキスト論」を打ち出すに当たって全面的に援用したもの）を巡る文献学的研究に基づいて、「持続」を破壊する同時代の性急さを批判する「転向」後のバルトが、期せずして「自筆原稿」のソシュールと「密やかな協奏を奏でている」ことを指摘することで、その主張により説得的な効果を持たせていると考えられる松澤の議論の最終部分に着目し、そこで援用されているソシュールの言説の真意とその援用のあり方について検討する事にしたい。

1、松澤によるソシュール原資料の解釈

バルト晩年の「転向」を論証する過程で、トクヴィルとアレントの言説を援用してきた松澤は、かつてバルトが「テキスト論」で全面的に援用したソシュールの『一般言語学講義』が「二人の弟子によるソシュールの原資料の改竄的編纂と執筆の所産」であり、最晩年のバルトはむしろ「自筆草稿」のソシュールと「密やかな協奏を奏でているように思える」として、ソシュールに見られる「言語に宿る持続的な時間性への深甚な思い」をその根拠として挙げている。では、松澤がソシュールに見ている「言語に宿る持続的な時間性への深甚な思い」とはどのようなものであろうか。

松澤が典拠としているのは、バルトが参照した『一般言語学講義』の二人の編纂者が「言語とこの伝統的時間との本質的な紐帯に理解が及ばなかったため」採用されなかった、ソシュールの「自筆草稿」における「重要な一節」と、『講義』の発刊後に見つかったために編纂者たちが利用できなかった、ソシュールの第三回講義が「最も精細」に筆記されていると言われるコンスタンタンによる聴講ノートの一節である。そこで以下、松澤がその二つの典拠からどのように「言語に宿る持続的な時間性へ深甚な思い」を読み取っているのかを見てみよう。

まず、「自筆草稿」の方であるが、松澤はその一節を次のように翻訳して引用する²⁾。

あらゆる記号論的諸体系のなかで、「言語」という記号体系は（中略）〈時間〉に直面するという試練を受けなければならなかった唯一のものである。この〈時間〉は相互の同意によって隣人から隣人へと根拠づけられるばかりではない。〈時間〉は父から息子への強制的な伝統によっても、またこの伝統によって生じるものに応じて根拠づけられるものなのである。こうしたことを除いては、〈時間〉は実験的に確かめることも認識されることも記述されることもないものである。（三三四二・一番）

この一節に関して、松澤は次のような解釈を述べている。「言語にとって本質的な時間とは、自然科学の依拠する物理学的時間とも歴史科学の依拠する日付のある時間とも決定的に異なるとソシュールは強調している。」けれども、この解釈は、引用された翻訳部分だけではその推論の過程を追うことがかなり困難である。そこでこの論稿の〔注〕において参照することが求められていた松澤の以前の論稿「ソシュールの現代性——伝統的な時間をめぐって」を見てみると、「自筆草稿」の引用部分の前に直結して次のような一節も併せて訳されて引用されていることが分かる³⁾。

言語学が自然科学の分野に属するのか、それとも歴史科学の分野に属するのかを知るために議論が重ねられてきた。言語学は両者のいずれにも属さない。それは存在していないとすれば〈記号論〉の名称の下に存在すべきであろう諸科学から成る一部門に属する。すなわち、それは記号の科学であり、あるいは人間が必要な取り決めによって自分の思想を言い表そうとするときに起こる事

柄を研究するものである。

この論稿では、この一節の後に先の一節をまとめて引用した後で、次のような解釈が書かれている。「言語学が自然科学にも歴史科学にも属さない最大の理由は、言語が『〈時間〉に直面するという試練を受けなければならなかった唯一のもの』だからである。言い換えれば、言語にとって本質的な時間とは、自然科学の依拠する物理学的時間とも歴史科学の依拠する規則性や変化を介して捉えられる時間とも決定的に異なるとソシュールは強調している。」どうやらこの論稿の方が、松澤の推論をやや詳しく追うことができそうである。そこでもう少し先を見てみると、この草稿の引用に基づいて、松澤はさらに次のように解釈を進めている。「ソシュールによれば、言語を真に言語たらしめるものは、慣習的な反復であり、とりわけ父から息子へ、世代から次の世代へと引き継がれていく伝統という時間なのである。ソシュールは言語の生命をなすこの時間性は、伝統ということを除外してしまうと、『実験的に確かめることも認識されることも記述されることもない』とまで書き添えている。」

しかしながら、ここに述べられている松澤の解釈が成り立つためには、まず、「自筆草稿」にある、言語だけが「時間」に「直面」するという「試練」を受けるということから、「時間」が言語にとって「本質的」であると言うことができないであらう。けれども、ここでソシュールが言語に関して言っているのは、言語だけが「時間」に「直面」するという「試練」を受けるということまでであり、仮にこの「時間」が「相互の同意」や「強制的な伝統」や「伝統において生じるもの」によって「根拠」づけられるものであったとしても、それは「時間」についてのことであって、この一節からは、言語にとって、そのような「時間」が「本質的」であるとは言うことはできない。つまり、「直面」するという「試練」を受けることによってだけでは、「試練」を受ける当の本体は、「試練」として「直面」する対象を自らにとって「本質的」なものと認める必要はないのである。従って、「本質的」という言葉は、少なくともこの段階では、松澤によって導入された解釈のための補助線のようなものとして見ることができるであらう。

さらに見直してみると、ここに挙げた松澤の解釈には、このような補助線のようなものをもう二点指摘することができる。一つは「言語を真に言語たらしめるものは慣習的な反復であり…」の部分であり、ここは引用された翻訳に従うなら、そのように「根拠」づけられるのは「言語」ではなく「時間」であるはずである。従っ

て、それを「言語」に置き換えた上で「…時間なのである」と受けるのは、引用されたソシュールの「自筆草稿」から判断できる範囲を越えている。実は、本来なら、引用されているソシュールのこの「自筆草稿」には、他の「原資料」には見られないある種の「時間論」が展開されていると読むことができるのであって、ここからは、ソシュールにおける時間の問題について、これまでにない新たな検討が必要になるはずである。しかし、その問題についてはまた稿を改めて検討することとしたい。

本題に戻ろう。松澤の解釈にはもう一つ、補助線のようなものが見られる。それは、先の草稿において「時間」を根拠づけるものとして挙げられていた三点、①「相互の同意」、さらには②「強制的な伝統」、と③「伝統において生じるもの」について、①「相互の同意」を松澤は「慣習的な反復」と言い換えたか、または②「強制的な伝統」と③「伝統において生じるもの」も併せた三点を「慣習的な反復」としてまとめたかした上で、それを受けて「とりわけ父から息子へ、世代から次の世代へと引き継がれていく伝統という時間」と言い換えているところである。わざわざ三点に分けてソシュールが述べているものを、ここでは松澤は敢えて「伝統という時間」という言葉に集約している。ところで、ここに見られる「伝統という時間」すなわち「伝統」が「時間」であるとする松澤の言葉についてであるが、ソシュールの言葉からは「時間」を根拠づけるものが「時間」であると読むことができないだけでなく、「時間」を根拠づけるものの一つとして挙げられているにすぎない「伝統」を「時間」と同列に読むこともできない。従って、ここではソシュールの草稿とは別に、松澤独自の「伝統・時間観」として、括弧に括っておくこととしたい。

次に、編纂者たちが参照することができた狭義の「原資料」だけでなく、遅れて発見されたために編纂者たちが参照することができなかった「原資料」、ソシュールの第三回講義では「最も精細」とされるコンスタンタンのノートから、松澤は次の一節を翻訳・引用している⁴⁾。

なぜ私たちは「人間」とか「犬」と言うのでしょうか。私たちより前にそのように言い継がれてきたからです。正当化は時間のなかにあります。(一二三五番)

松澤は、この一節について、次のように考察を展開している。『正当化は時間のなかにある』という一文の意味することは、言語は合理的には正当化できない

ものであり、時間の効果によってしか正当化できないということであり、伝統と明らかに重なり合う。なぜなら言語文化はかならず或る世代からそれに続く世代へと、程度の差こそあれ、変化しつつ引き継がれていくものだからである。昨日の言語と同じ言語を今日も使い、明日も使うという持続性の無意識的な確信がなければ、人間は一日として安心して暮らすことはできない。それは言語がコミュニケーションや表現の単なる手段ではなく、精神がそれと一体となることではじめて働き始めることが出来るような根源的なものだからである。」

この考察においても、「時間の効果」「伝統」「持続」のような松澤独自の解釈のための言葉を見ることができる。なかでも、「昨日の言語と同じ言語を今日も使い、明日も使うという持続性の無意識的な確信がなければ、人間は安心して暮らすことはできない」という一節は、特に注目しておく必要があるだろう。後節で論じるが、第三回講義においてソシュールが使用する「時間」概念について、それが「我々の経験的世界から生み出される持続する時間」とは明確に違うものであると指摘する研究が存在するからである。

以上の松澤の考察は、続く段落において、ソシュールの解説のような形で次のように詳しく言い換えられている。「言語が他の記号体系（人為的な約束事、諸々の制度）と異なる点は、時間という所与によって不易性と可易性という両面を持つことである。…中略…言語は『あらゆる個人が、毎日二十四時間』全面的に依拠している『比類のない制度』（一二二六番）である。他の制度のように対象として観察し分析し改変を施すといった人為的操作をたやすく許さないものになっているのは、そこに膨大な時間の堆積、すなわち伝統的時間が働いているからなのである。…中略…時間の重力の外で想定される自由に訂正の効く約束事の体系は、記号体系たり得ても、未だ言語ではありえない。不易性を帯びることではじめて言語は、話し手の精神と一体化し不分離となってくるのであり、そこにこそ伝統としての言語ということの最も深い意味がある。静態的な言語状態とは、時間による効果、すなわち時効 *préscription* によってしか正当化されえないものなのであり、空間的な場所を限定し凍結して、そこに作用している不可視の伝統的時間を結晶化したものなのだとと言えるだろう。したがって、『時間の軸上の一定の面における状態を共時態と呼び、その静態的事実を、時間の作用を無視して記述する研究を共時的研究と言う』というような丸山圭三郎による常套化した定義は、ソシュールの重視した伝統的時間をすっかり忘却したものと言わざるをえないのである。⁵⁾」

ここで松澤が批判的に言及している丸山圭三郎の定義は、「原資料」によるソシユール研究を提唱しているにもかかわらず、「テキスト論」におけるバルトが立脚した構造主義的なソシユール解釈と重なっていることで、特に否定されるべきものとして挙げられていると考えることができる。(ここで丸山の名誉のために一言付け加えておくと、この定義は「原資料」に見られる文言から見て必ずしも矛盾するものではない。例えば、ソシユールの第三回講義のための「自筆草稿」には「同時代性の軸（そこでは時間の要因を無化する）」とあり⁶⁾、また、コンスタンタンのノートにも、同じ趣旨の説明を見ることができる⁷⁾。従って、それを松澤自身ではなくソシユールの名のもとに否定することは、いささか公平を欠くことと言わざるを得ない。ソシユールの名のもとに…。ここで少し、松澤の方にも目を転じて見よう。例えば、先の松澤の文中に見られる「時間の重力」という言葉に注目すると、ソシユールの「原資料」においては「言語」に対して「重力」の働きをしているのは「時間」ではなく社会、すなわち相互に言語行為を行っている集団の方である。ソシユールは第三回講義において、本来恣意的なものである「言語」に対するそのような集団による「重し」とは別に、新たに「時間という要因」を導入することで、「言語」における恣意性の特殊な制限のあり方について論じている。しかしこのことについては後節で改めて触れることにしたい。)

このような指摘を行った後で、松澤は段落を変え、バルトに言及しつつ、両者の思想的近接性を自らの言語観と重ねるようにして次のように述べている。「こうしてバルトの『明るい部屋』とソシユールの言語をめぐる考察は持続や伝統的時間という一点で遭遇し反響し合う。言語が言い継がれること以外には根拠を持ち合わせていないということ、それは、無根拠のアナーキーを顕揚することとは正反対のことを意味している。すなわち言語とは死者と生者の共同性としてあるという不可視の、しかし厳粛な事実を無言に指し示しているのである。言語こそ最も遠くなるほどはるか遠い過去からの無数無名の死者による生者への、おそらく最大の贈与なのではないだろうか。⁸⁾」

以上が、松澤が基づいた二つの典拠と、そこから松澤がソシユールにおける「言語に宿る持続的な時間性への深甚な思い」を読み取っている推論の全体である。ここから私たちは、少なくとも松澤自身における「言語に宿る持続的な時間性への深甚な思い」を読み取ることはできるであろう。けれども、その「思い」をソシユール自身の言葉から私たちが直接読み取ることができるかについては、もうすこし検討する必要があるであろう。

ところで、一つ目の典拠であったソシュールの「自筆草稿」については、英語訳が出版されていて、そこでは松澤のものとは違う解釈を見ることができる。また、二つ目のコンスタンタンのノートについては小松英輔によって校定されて出版され、その校訂版に基づく日本語訳も出されている。従って、松澤が引用した部分とその解釈を、コンスタンタンのノート全体を見た上で私たちが判断することも可能である。そこで次節では、まず「自筆草稿」部分の英語訳に見られる解釈について見てみたい。

2、「自筆草稿」の英語訳に見られる解釈

ソシュールの「自筆草稿」や講義の筆記記録は、『一般言語学講義』の編纂者たちが参照したもの以外にもその後いくつか見つかっており、ソシュールの「自筆草稿」に関しては、1990年代に新たに見つかったものも含めて、2002年にそれらがまとめられて出版されている⁹⁾。また、2006年には英語訳が出版され、その翻訳を英語圏におけるソシュール研究者であるキャロル・サンダースらが担当している¹⁰⁾。では、さっそく当該部分の英語訳を見てみよう。

Of all the semiological systems the semiological system of ‘language’ is the only one (along with writing with which we shall deal in due course) which has had to face up to being subject to *Time*, and which is not only forged through mutual consent between neighbours, but also handed down inexorably by tradition from father to son, and *subject to the uncertainties of this tradition*, and outside this remains untested, unknown, and undescribed.

以下、便宜的に訳してみる。

すべての記号学的体系のなかで、「言語」という記号学的体系は、(後ほど扱う予定の書記言語とともに) **時間**に従属させられるという事態に直面しなければならなかった唯一つのものである。「言語」は、隣人同士の相互承認を通して築き上げられるばかりでなく、父から子への伝統によって強制的に手渡され、また、**この伝統の不確かさに従属させられる**。ここを外れると、それは試す事も、知ることも、特徴を述べることもできないままである(注:太字はイタリッ

ク体による強調部分)。

この英語訳において、先に紹介した松澤の訳との決定的な違いは、後半部分が「時間」についてではなく、「言語」について語られていると解釈している点である。また、その内容に関しても、どちらかと言うと「伝統」というよりは「伝統の不確かさ」を強調しており、ここからは、翻訳者がこの部分を「伝統」という言葉でひとまとめにできるとは考えていないことが明らかである。

では、この解釈の違いはどこから来ているのであろうか。実は、両者が典拠としているソシュールの「自筆草稿」の該当部分は次のようなものである¹¹⁾。

〈Parmi tous les systèmes sémiologiques〉 le système sémiologique
‘langue’ est le seul (avec l’ écriture 〈don’ t nous parlerons en temps
et lieu〉) qui ait eu à 〈affronter cette epreuve [de]〉 se trouver
en présence du *Temps*, qui ne se soit pas simplement 〈fondé〉 de
voisin à voisin par mutuel consentment, mais aussi de père en fils
par impérative tradition et *au hazard de ce qui arriverait en cette
tradition*, chose hors de cela inexpérimentée, 〈non connue ni décrite〉 .
(注：〈 〉は棒線等による後からの挿入、()は原文通り、[]は校定者による書き加え)

ソシュールの「自筆草稿」と呼ばれるもののなかで、きちんと清書されているものは限られている。中には書きかけのものや断片的なメモのようなものも多く、この草稿もどちらかと言うと書きかけの性格を持っているようであるが、その分ソシュールが書こうとこだわっていることの痕跡が生々しく残っているものでもあろう。実は、松澤はこのような自筆草稿の研究を専門としているので、松澤の解釈には一定の権威が認められると考えることができるのである。けれども、英語訳を担当したサンダースらもソシュール研究においては第一人者なのであって、彼らが上記のように訳すことにも根拠があるはずである。例えば、英語訳では、ソシュールの草稿に見られる強調（イタリック体）を重視し、原文では言語を根拠づけるものとして挙げられていた三者のうち、強調されている伝統から偶然生まれたもの「伝統の不確かさ」について、その前の文で強調されている（言語を従属させるものとしての）「時間」と同格のものとしての解釈を打ち出して

おり、また、「時間」(*Temps*)に続くカンマと関係代名詞(, qui)について、それが直前の「時間」を受けるのではなく、その前節の関係代名詞(qui)と同様、唯一つのもの、すなわち「言語」を受けるものと解釈して、関係代名詞(which)の前に接続詞(and)を加えて訳している。この二点については、原文をそのまま訳したものというより、サンダースらのソシユール研究の成果に基づいての判断を経たものであると言えることができるであろう。実際、この部分だけを切り離して読んだ時には、前者では、言語を根拠づけるものとしての三者という枠組みで翻訳するのが本来であろうし、後者では、quiは直前の*Temps*を受けるものと考えるのが自然かもしれない。けれども、この「自筆草稿」をソシユール研究者として他の「原資料」との関連のもとに置いた時、サンダースらのような訳をあえて採用する理由も見えてくる。つまり、この英語訳は、他の「原資料」に見られる内容に対して整合的であろうとする意図のもとになされていると考えることができるのである。けれども、ソシユールの「自筆草稿」ひいては「原資料」全てが整合的とは限らないのであって、ソシユールが準備していた『書物』のための草稿や学生の前で行われた一連の講義との関係が未だ明確になっていないこの「自筆草稿」に関して、その解釈は別として、松澤のように翻訳すること自体が誤りであるとは必ずしも言うことはできない。この点においては、むしろ、この断片はソシユール解釈の可能性を広げるものであるのかもしれない。

ところで、松澤がもうひとつの典拠としたコンスタンタンのノートについては、松澤の引用箇所は極めて短く、また翻訳ばかりでなくその部分の解釈上の問題も一見なさそうなものであった。けれども、それは先の「自筆草稿」とは違って、受講生を前に行われた一連の講義のなかに見られる文言であって、その意味では断片的な「自筆草稿」とは異なったアプローチを必要とするものである。つまり、この部分は、一連の内容をなすその講義における他の文言との整合性を重視して解釈される必要があるのである。

そこで次に、第三回講義におけるこの引用部分が、講義の他の文言とどのような関係にあるのかについて見てみたい。

3、コンスタンタンのノート引用部分の再解釈

松澤が引用した一節は、ソシユールの第三回講義のうち第二部「言語」について行われた1911年4月25日から7月4日までの講義、計18回分が記録されているコンスタンタンのノートから、第二部の8回目、5月30日付の記録に見ら

れるものである。なお、5月30日とそれに続く6月2日の講義については、幸いにもソシュール自身の用意した自筆のメモが残っている。第二部は、第一部での「諸言語」に関する外的側面からのアプローチを踏まえ、「言語」というものについて内的側面からアプローチしたもので、前半は個々の言語行為としてのパロールと区別されるものとして、社会的産物としてのラング（言語）という観点からそのありようを論じている。その構成は、まずパロールとラングを区別した上で、「言語記号の性質」、次に「言語を構成する具体的実体」、さらに「抽象的実体」、その上で「言語における絶対的及び相対的な恣意性」という問題を順次論じ、その上でまた改めてラングとパロールの関係について振り返って補足している。ソシュールはこの補足を行った5月19日に、さらに振り返って先の「言語記号の性質」とその次の章の間に、「記号の不変性と可変性」という新たな章を補足する必要があるとして、それまでの「社会的要因」に加えて、新たに「歴史的要因」を導入する議論を開始する。私たちがこれから見ようとしている5月30日の記録は、5月19日に開始されたその議論を受けて、初めて「時間」という概念を中心に議論を展開させたものである。因みに、続く6月2日の講義では「時間」の導入によって、言語学が「静態言語学」と「歴史言語学」という本質的に異なる二つの学問分野に分かれることの必然性が論じられ、その後、その問題をめぐって6月6日、同9日、13日、16日、20日と論を進め、ようやく6月23日に至って、言語学における大部分の事象が属する「静態言語学」についての議論が開始される。なお、これは、前半の、「言語記号の性質」の後、「言語を構成する具体的実体」以降の議論を、また新たに論じ直したものと読むことができる。なお、ソシュールの講義は、この第二部が一区切りしたところで終わっており、ソシュール自身の健康上の理由から、予告された第三部「個人における言語活動の能力と行使」は行われることはなかった。以上のように、講義の流れとしては、「時間」という概念は、言語学の対象を「共時態」と「通時態」に二分し、言語学の在り方を「静態言語学」と「動態言語学」として区分するために導入されたものであり、まずはそのような文脈の中で解釈される必要があるだろう。

では、松澤が引用している5月30日の講義の中の一節は、具体的にはどのような文脈の中にあるのだろうか。もう少し詳しくその流れを追ってみよう。

5月30日の講義、コンスタンタンのノートは次のような言葉から始まっている¹²⁾。

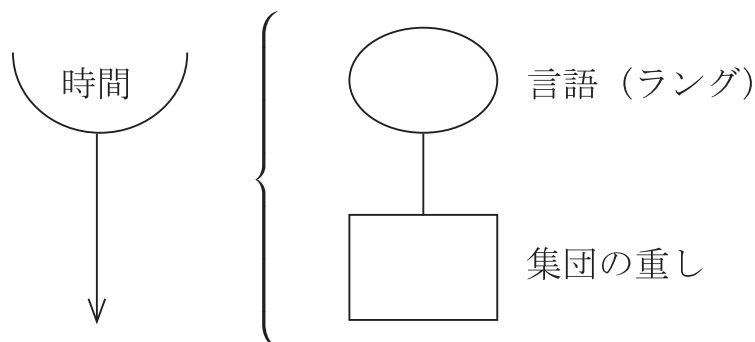
言語（ラング）が社会的な事実であるという事情は、言語に重心を創り出す。しかしその事実は初めから認めていたことなので、今さら言語を二つに分割する必要はない。時間という要因を付け加えなければならない。社会的な力は時間の機能の中で作用するもので、そのことが、どの点において言語が自由でないかを示してくれている。

実際、言語は〈すべての時間において〉過去と連動していて、そのことが言語の自由を奪っている。仮に社会的なものでなければ自由は奪われなかっただろう。けれども、時間、すなわち世代から世代への伝達もまた、考慮すべきものとして付け加える必要がある。（注：〈 〉は挿入。（ ）は戸田による。）

前回（5月19日）の講義で「社会的要因」に対して「歴史的要因」として提起した問題を受けて、ここではソシュールは新たに「時間」という用語を使って、言語を規定する条件についての議論を展開しようとしている。

ここに見られるのは、本来恣意的なものであるはずの言語は、同時に社会的なものでもある。すなわち、個々の言語活動と区別して言語を対象化するために、それを社会的なものとして捉えることによって、本来の、いわば〈原理的位相〉と〈社会的位相〉という二重性を持つという、それまでの議論に付け加えて、新たに「時間」という要因を導入することで、〈社会的位相〉に潜在する言語の恣意性を制限する要因を「時間」の中で発動させること、すなわち〈原理的位相〉とそれを制限する〈社会・歴史的位相〉ともいうべき構図を、ソシュールは打ち出している。いわば議論の新たな局面の開始部分である。

因みに、この頁の欄外には、次のような図が描かれている¹³⁾。



この図からは、社会、すなわち「集団の重し」と、さらにその上に「時間」の機能が関与することで、本来恣意的なものである「言語」が制限されるという構

図を、口頭での説明を補う形で容易に理解することができる。

さて、松澤が引用した一節は、その次の論述の中にある。少し長くなるが、以下、見てみよう¹⁴⁾。

最初、その契約の中に、時間という要因が占める余地があることは気づかないだろう。そして実際、理論的には、〈論理的な、または心理的な何ものかとして〉、言語は時間とは無関係に考えることができる。時間の力は、一瞬ごとに、恣意性や〈自由な選択〉と呼ぶ力を抑えつける。我々はなぜ *homme* (ヒト) や *chien* (イヌ) と言うのか。我々の前に *homme* や *chien* と言っていたからである。正当化は時間の中にある。それは、恣意性を消し去らず、また同時に消し去る。そのことは、時間の問題と恣意性の問題というお互いに対立する関係を見えなくはしない。〈要約〉言語を構成する記号の不自由さは、歴史的側面に起因しており、言い換えれば、言語の中の時間という要因の現れである。なぜなら、この記号の不自由さは、言語における時間という要因の連続、〈世代を通過して記号が連続していること〉に基づいているからである。

時間という要因のもう一つの現れは、第一の場合とは反対の姿をとる。すなわち、いくつかの世代を通過するうちに起こる記号の変化である。〈そういうわけで〉この章のタイトルで記号の不変性と可変性〈変わりやすさ〉を一緒に述べている。二つの事象は緊密に関係し合っており、ここでの分析からそれらが同じ原因を持つことは明らかである。(注:〈 〉は挿入。()は戸田による。)

ここに見られるように、松澤が引用した一節は、「言語記号の恣意性」との関係で論じられている部分である。その直前には、「時間の力は、一瞬ごとに、恣意性や〈自由な選択〉と呼ぶ力を抑えつける」とあり、またその直後には、「それは恣意性を消し去らず、また同時に消し去る。そのことは、時間の問題と恣意性の問題というお互いに対立する関係を見えなくはしない」とある。では、引用にある「正当化は時間の中にある」とは、はたして松澤の言うように「伝統と明らかに重なり合う」ものなのであろうか。ここで語られている「時間」は、「一瞬ごと」の「連続」であり、それは「いくつかの世代」を「通過」するうちに「変化」をもたらすものである。また、「それは恣意性を消し去らず、また同時に消し去る」ものであり、「そのことは、時間の問題と恣意性の問題というお互いに対立する関係を見えなくはしない」ものでもある。ここで語られているような「一瞬ごと」

の「連続」によって制限されているという事態は、言語記号の恣意性とそれを制限する要因の対立という、どちらかと言うと「現在」の問題に焦点を当てており、少なくとも、「伝統と明らかに重なり合う」ものだとは言えないであろう。

次に、この部分の解釈において、松澤が「伝統」とともに強調していた「持続」について見てみよう。

松澤もその作業に加わったことがあるということであったが、かつてソシュールの「原資料」の根本的な校定を行い、一般言語学に関する三回の講義の主要なノート本文を確定し、出版するという画期的な業績を残している小松英輔は、ちょうどこの議論で問題になっている「時間」概念について、「時間という所与は、すなわち歴史的な概念」というソシュールの「自筆草稿」を示しながら、「我々の経験的世界から生み出される持続する時間に対して、言語学的な非連続の時間がここでは問題にされている」と述べている¹⁵⁾。このことは、「時間」と「持続」を重ね合わせる松澤のソシュール解釈に十分な疑義があることを示していると考えられる。ところで、小松の言う「言語学的な非連続の時間」とは何を指しているのだろうか。文脈から考えると、それはおそらく「通時態」を指していると考えられる。私たちの理解では、第三回講義の5月30日から6月2日にかけて、ソシュールは「時間」という概念を導入することで「共時態」と「通時態」という言語学における根本的な区別の必然性を論じようとしていた。なお、ソシュールがその後で述べていることによれば、「通時態」は言語学者にしか関心を持たれないものであったから、小松はそのことをも含んだ上で述べているのであろう。しかしながら、ソシュールにおける「時間」の問題については、先に松澤が翻訳したソシュールの「自筆草稿」における「時間論」の問題とも併せて、別の機会に詳しく検討することとしたい。今回は、小松の言うように、はたしてソシュールにおける「時間」は「持続」と重ならないものなのかということについてののみ、私たちなりに確認することにしよう。

5月30日の講義に関しては、その次の6月2日の講義にも使われたソシュール自身のメモ、すなわち「自筆草稿」が残っている。ソシュールはこの二回の講義において、同じメモから順番等の変更をしながら論述を行ったようで、メモと実際の講義の順序は一致していない。そこで、先に引用した部分に内容的に該当すると思われる部分を一つ探し出し、以下に訳してみる¹⁶⁾。

〈言語活動（ランゲージュ）〉の中から、言語（ラング）を言語行為（パロール）

から切り離れた。すると、かくして、我々は、話す大衆の心の中に存在する（* その部分、…の中に存在する）ものと、言語行為（パロール）の事実ではないものを、同時に持つ。〈言語（ラング）を採り上げると〉、言語（ラング）を〈* 純粋な体系であり〉論理的なものであると見做すことを妨げるものは存在しないように見える。というのは、記号は恣意的だからである。話す大衆という事実は、それ自体としては、心理学的・論理的な意味でしか、事象を変えることはない。が、直接には現さない。けれども、社会的心理学的な事実と結びついた時間（*持続）が介在すると、その時点で、言語（ラング）は自由ではないと我々は感じる。話す大衆×時間。（注：〈 〉は挿入、（* ）は原文通りだが（ ）内を線により抹消、〈* 〉は棒線等で挿入されながらも線により抹消。また、（ ）は戸田による。）

ソシュールは、この「自筆草稿」において、時間を説明するために括弧の中に書いた「持続（la Durée）」という言葉と、一たん書いた後でわざわざ線で消している。そして実際の講義においては、「伝達（la transmission）」や「連続（la continuité）」、「歴史的現実（la réalité historique）」、さらには「連動して（solidaire）」、「通過する（traverser）」等の言葉を使い分け、結局のところ「持続（la Durée）」という言葉を使っていないことが、コンスタンタンのノートから確認できる。ソシュールは明晰さを特に重視する研究者であり、イメージ化しやすい言葉であっても、避けたい種類の混乱が予想される場合、敢えてその言葉を使わなかったと考えるのが、この場合妥当であろう。つまり、ソシュールは、避けたい種類の混乱、すなわち「時間」と「持続」とを混同することのないよう、慎重に言葉を選んでいたことが、これらの「原資料」の検討から窺えるのである。

以上の検討の結果、松澤が典拠としたコンスタンタンのノートの一節は、その解釈において、同じノートにおける他の部分との整合性を欠くものであることが明らかになった。

4、ソシュールにおける「伝統的時間」の問題

ここまで、松澤が、ソシュールと彼の描く晩年のバルトとの類同性を主張するための典拠になっていたソシュールの「原資料」とその解釈について検討してきた。その過程で明らかになったことの要点をまとめると、次のようになる。

1、松澤が典拠として翻訳・引用したソシュールの「自筆草稿」について、そ

の翻訳が現在見ることでできる英語訳と大きく異なる場所が見られた。このことについては、フローベールの「自筆草稿」研究の第一人者でもある松澤が字義を捉え損なっているというのではなく、この「自筆草稿」自体が特殊な意義を持っている可能性を認めることができた。

2、松澤の翻訳した「自筆草稿」に対する松澤自身の解釈には、その翻訳内容自体との不整合が認められ、検討の結果、この「自筆草稿」からは「伝統的時間」についての認識は得られていないことが明らかになった。

3、松澤がもう一つの典拠として翻訳・引用したコンスタンタンのノートの一節について、翻訳上の問題は見られなかったが、その解釈においては、ノートの他の部分との不整合が認められた。検討の結果、この「原資料」からも、「伝統的時間」についての認識は得られていないことが明らかになった。

4、ソシュールの「原資料」から「伝統的時間」についての認識が得られていないことは、バルト晩年に関する松澤の見解において、その重要な論拠の一つであった「自筆草稿」のソシュールとの「密やかな協奏」が未だ認められていないことを示している。

5、松澤の翻訳したソシュールの「自筆草稿」には、ソシュールにおける「時間」概念を改めて検討しなおすことの必要性を認めることができた。これについては、稿を改めて取り組むこととした。

以上である。

おわりに

今回の考察の結果、松澤によるバルト晩年の「転向」の論証は、最終段階におけるソシュールとの比較において重大な欠陥を認めることができた。論拠としてソシュールが使えていないとすれば、バルト晩年における「転向」を主張する松澤の議論において、少なくともこの部分に関しては誤りが認められることが確認されたのである。そこで、次に検討しなければならないのは、松澤が援用し、晩年のバルトも読んだ可能性があるハンナ・アレントとの思想的連関である。次回は、この課題に取り組むことにしたい。

なお、晩年のバルトの問題とは離れて、今回の検討の過程でソシュールにおける「時間」概念についての若干の謎が発見された。この問題についても改めて取り組む機会を設けることとする。

[注]

- 1) 松澤和宏「ロラン・バルト『明るい部屋』とソーシャル ——審美的個人主義・共通感覚・伝統的時間をめぐって——」松澤和宏・田中実編『これからの文学研究と思想の地平』右文書院 2007 年 7 月
- 2) 同 20 頁
- 3) 松澤和宏「ソーシャルの現代性——伝統的な時間をめぐって」月刊『言語』2004 年 12 月号、大修館
- 4) 前掲書 1) 21 頁
- 5) 同 22 頁
- 6) 「ソーシャル講義ノート 1911 年 5 月 30 日」、小松英輔編、相原・秋津訳、フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学 第一回講義 リードランジェによる講義ノート』エディット・パルク 2008 年 3 月 286～7 頁
- 7) 小松英輔編、相原・秋津訳、フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学 第三回講義 〈増補改訂版〉』エディット・パルク 2009 年 3 月 206 頁
- 8) 前掲書 1) 22 頁
- 9) Ferdinand de Saussure, *Écrits de linguistique générale*, Texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Gallimard, 2002
- 10) Ferdinand de Saussure, *Writings in General Linguistics*, Translated into English by Carol Sanders and Matthew Pires with the assistance of Peter Figueroa, Oxford University Press, 2006, 188 頁
- 11) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale, tome 2, fascicule 4*:Édition critique, Par Rudolf Engler, Otto Harrasowits. Wiesbaden, 1974, 47 頁
- 12) F. de Saussure, *TROISIEME COURS DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE (1910-1911) d'après les cahiers d'Émile Constantin*, Edited and translated by EISUKE KOMATSU & ROY HARRIS, Pergamon Press, 1993, 97 頁, (訳文は戸田)
- 13) 同
- 14) 同
- 15) 小松英輔「ソーシャルの『一般言語学講義』——エングラール版批判——」、小松英輔編、相原・秋津訳、フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学 第一回講義 リードランジェによる講義ノート』エディット・パルク 2008 年 3 月 282 頁
- 16) 前掲書 6)、287 頁